



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

中国語教科書カタログから見る音声教材の変遷と大学生の音声教材使用状況について

メタデータ	言語: 出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部 公開日: 2024-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 范, 文玲 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000193

中国語教科書カタログから見る音声教材の変遷と 大学生の音声教材使用状況について

范 文 玲*

アジア言語・文化研究分野

(2023年8月30日受理)

要 旨

2007年以降のスマートフォン普及に伴い、外国語教育における音声教材も不断の進化を遂げている。本稿では、大学生向けの中国語教科書を刊行している出版社3社の教科書カタログを調査対象として、近年の音声教材の変遷を明らかにし、さらに東京学芸大学の中国語履修者および授業担当教員を対象として、外国語学習に欠かせない音声教材の利用状況および満足度を調査した。

その結果、次のことが明らかになった。①近年において出版社3社ではCDが完全にあるいは徐々に淘汰され、音声ダウンロード、WEB音声、音声ダウンロードアプリが主流である。②会話中心の教科書において、WEB音声教材の使用率は高かったが、満足度は決して高いとは言えず、操作性・見やすさ・内容・機能等において改善が求められる。

キーワード：外国語教育，中国語，中国語教科書，教科書カタログ，音声教材

1. はじめに

2007年にAppleがスマートフォン「iPhone」を発表し、翌年2008年にソフトバンクモバイル（現ソフトバンク）より国内向けに販売が開始され、2009年にはAndroid対応のスマートフォンも発売された。これを契機として、1999年から進化が続いていたフィーチャーフォンとの共存の時代を経て、スマートフォンの普及が進み、2022年現在、日本におけるスマートフォンの個人の保有率は77.3%、世帯の保有率は90.1%¹であり、年代別に見ると、13～19歳では86.6%、20代では93.4%²となっている。このような背景に伴い、外国語教育における音声教材もおよそカセットテープ→CD→音声ダウンロード（以降「音声DL」）・WEB音声→音声ダウンロードアプリ（以降「音声DLアプリ」）³という変化・進化を辿っている。

外国語学習において繰り返し音声を聞くことは必要不可欠であり、中国語学習においても音声教材の重要性は高い。本稿では、大学生向けの中国語教科書を刊行している代表的な出版社3社（朝日出版社、白帝社、白水社）の教科書カタログを調査対象として、近年の音声教材の変遷を明らかにする。さらに筆者の勤務校である東京学芸大学（以降「本学」とする）で第二外国語として中国語を履修している1年生と2年生および授業を担当している教員を対象として、音声教材の利用状況に関する調査を行った結果を分析・考察し、今後のより良い中国語教育の一助としたい。

2. 先行研究

大学生の音声教材使用状況に関する研究に、中西・植松（2008）の「大学生の音声教材再生環境について

* 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 アジア言語・文化研究分野（184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）

—2007年アンケート調査から見る現状と展望—, 中西・後藤 (2012)「大学生の音声教材再生環境について (2) —2007年調査と2011年調査を比較して—」がある。前者は摂南大学で外国語の授業を受講する学部学生839名からの回答, 後者は同大学外国語学部の学部学生161名からの回答を得ており, 比較的大規模な調査となっている。ただ, 当該研究は両者とも「音楽と音声教材は同じオーディオ機器で聞くはずだという立場を採り⁴⁾, 音楽を聞く方法について調査をしており, 著者ら自身の懸念点としても挙げられているが, 音楽を聞く方法と語学教材を聞く方法が完全に同じであるとは限らない。例えば, 当時流行していたMD (ミニ・ディスク) や iPod で音楽を聞くには CD から機器にデータを入れる作業が必要になるが, その手間をかけることに対するモチベーションは, 自分の聞きたい音楽と大学の授業として受講している外国語学習とでは, 異なることが予想されよう。本稿では, 本学の中国語授業で使用している特定の教科書の音声教材について直接問う調査を行い, 大学生の外国語学習における音声教材使用状況の実態をより明確にする。なお, 当該研究は, それぞれスマートフォンが登場する前と登場した後のものであるが, 後者の調査結果において「音楽を再生するのによく使う機器 (複数選択可)」の質問で「デジタルオーディオプレーヤー」を選択した者40%に対して, 「スマートフォン」は10%にとどまっている。デジタルデバイスは当時からさらに急速な進化を遂げており, 今回の調査で最新の情報を提供したい。

また, 中西 (2009)「QRコードを利用した外国語音声教材の携帯電話向け配布一紙媒体とデジタル機器をつなぐ試み—」では, 教科書を読み上げる模様を動画共有サイトに掲載し, そのURLをQRコードに変換して教科書に印刷し, 学生の音声教材へのアクセスを容易にする試みについて紹介されており, 携帯電話からアクセス可能な環境を持つ学生が9割を超えること, 携帯電話に音声教材を配布することを望む者は4割を超えるもののCDによる配布を望む者も同程度いること等を明らかにしている。本学で使用している中国語教科書もQRコードを教科書に印刷してスマートフォンで簡単にアクセスできるようにしており, 今回の調査でより詳細な質問項目を設けて分析する。

3. 各社中国語教科書音声教材の近年の種類と変遷

市場には様々な中国語学習のための書籍が刊行されているが, 大学の授業での使用を想定して作成された

教科書の多くは, 朝日出版社, 白帝社, 白水社, 駿河台出版社, 好文出版, 金星堂, 三修社等の出版社より刊行されている。本研究では, その中でも代表的な朝日出版社, 白帝社, 白水社の3社の近年の教科書カタログを分析対象とし, 各社の音声教材の変遷を明らかにする。

3.1 朝日出版社 (2018年～2023年)

3.1.1 カタログ概要

朝日出版社は1962年に大学生向けのドイツ語テキストの出版から始まり, 60年を超える歴史を有する。⁵教科書分野では, 中国語以外に英語, 高校英語, ドイツ語, フランス語, 中国語, スペイン語, 韓国・朝鮮語, 諸外国語, 音楽教育/保健体育の教科書を出版している。中国語教科書のカタログは単体で冊子になっており, 背表紙タイトルは『○○○○年版中国語教科書カタログ』, 表紙タイトルは『中国語カタログ○○○○ (西暦年)』である。

本編の前に「新刊」, 「好評テキスト」およびお知らせ等が掲載されており, 「好評テキスト」は本編に再掲されている。本編は「ビデオ・DVD関係教材」(2023年版では「WEB動画・DVD関係教材」となっている) / 「初級」 / 「初級～中級」 / 「中級」 / 「中級読み物」 / 「高校中国語」の6つのカテゴリーから構成されている。付属資料や音声についてはアイコンで表示されており, それぞれの記号の意味が本編最初に一覧で掲載されている。巻末には索引が付いている。

3.1.2 アイコンの種類の変遷

音声教材の変化に伴い, 前述した本編最初のアイコン一覧にも変化が見られる。【表1】は各年のアイコンをまとめたものである。なお, アイコン一覧の頁には「教科書をご採用の先生には, 上記付属品を献呈させていただきます。ご希望の際は種別を併せお申し込みください」との一文があり, 学生がすべて入手できるわけではない。反対に, CD付きの教科書は本編でそれぞれの教科書に「CD付」のアイコンが付いており, 2020年版までは一覧には掲載されていない。

【表1】に示すように, 2021年版からアイコン表示に大きな変化が見られ, 本編と照らし合わせてみると, 次の3点のことが言える。

①2021年版より「テープ」「ビデオ」「教授用テキスト」のアイコンがなくなり, 「※カセットテープ音源あり」, 「※ご採用の先生にビデオ無料献呈」, 「※教授用テキストあり」等の記述が本編各教科書説明文に

組み込まれた。

②2021年版より「音声DL」が完全に「音声DLアプリ」にシフトした。換言すれば、「音声DLアプリ」の登場によって「音声DL」が淘汰されたとも言えよう。ただし、朝日出版社の新美朱理氏により、「音声DLアプリ」の運用が開始されたのは2020年版新刊から⁶であるため、2020年は両者が併存している。また、「音声DLアプリ」の登場によって2020年版までの「WEB動画／音声」が「WEB動画」「WEB音声」の二つに分けられた。これはおそらく、「WEB音声」と「音声DLアプリ」の違いを「※」の記述によって明確にするためであると考えられる。

③2022年版より、全ての教科書にCD添付がなくなった。ただし教授用CDは残っている。

【表1】朝日出版社カタログアイコン

アイコン	アイコンの説明	2018	2019	2020	2021	2022	2023
TM	教授用資料	○	○	○	○	○	○
テープ	カセットテープ	○	○	○			
ビデオ	ビデオテープ	○	○	○			
教授用CD	献呈用音声CD	○	○	○	○	○	○
別冊練習帳	別冊練習帳	○	○	○	○	○	○
教授用テキスト	別冊教授用テキスト	○	○	○			
教授用パソコンデータ	献呈用教授用パソコンデータ	○	○	○	○	○	○
在庫僅少	在庫僅少のテキスト	○	○	○	○	○	○
音声DL	音声ダウンロードサービス	○	○	○			
WEB動画／音声	ストーリーミングサーバーにコンテンツをアップ	○	○	○			
教授用DVD	献呈用映像DVD				○	○	○
CD添付	CD添付				○		
DVD添付	DVD添付				○	○	○
MP3音声添付	MP3音声添付				○	○	○
別売りDVD	別売りDVD				○	○	
WEB動画	WEB動画				○	○	○
WEB音声	WEB音声※パソコン・スマートフォン対応				○	○	○
音声DLアプリ	音声ダウンロードアプリ※スマートフォン専用				○	○	○

3.1.3 音声教材の変遷

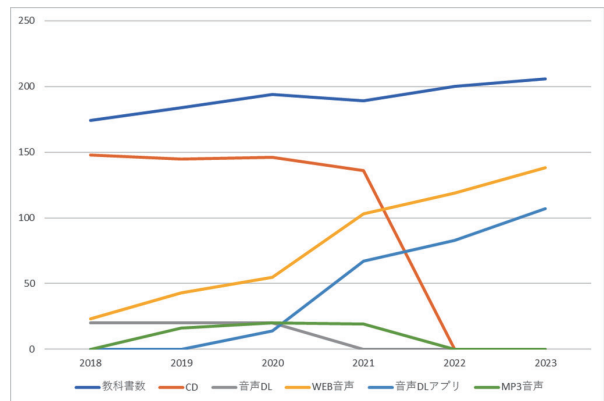
ここでは、学習者である学生が入手できる音声教材を中心に6年間の変遷を見ていく。調査項目は、CD（教授用CDは含めない）、音声DL、WEB音声、音声DLアプリ、MP3音声の5つとする。調査範囲は、先述の6つのカテゴリーのうち、「初級」／「初級～中級」／「中級」／「中級読み物」の4つとする。⁷上記5種の音声教材の数をまとめると【表2】に、グラフにすると【グラフ1】となる。なお、一つの教科書に複数の音声教材が付いているものも多数ある。

「教科書数」は「初級」／「初級～中級」／「中級」／「中級読み物」の合計刊行冊数を指しているが、やや増加傾向にある。5種類の音声教材のうち、WEB音声と音声DLアプリが急速な増加傾向にあり、それに反して2021年に71.9%⁸を占めていたCDが翌年には0%となっている。音声DLはもともと数が少なかったが、2021年には0%となっている。MP3音声は2019

年に登場し、わずか3年で廃止されたことになる。なお、【表1】の通り、2022年版、2023年版のアイコン一覧にも「MP3音声添付」は掲載されているが、本編中で当該アイコン表示のある教科書は見当たらなかった。2019年版と2020年版のアイコン一覧には「MP3音声添付」のアイコンはなかったが、本編の各教科書に「MP3CD-ROM」のアイコンがついており、「※貼付CDはMP3対応音声ファイルCD-ROMです」と記載されている。

【表2】朝日出版社音声教材数

	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教科書数	174	184	194	189	200	206
CD	148	145	146	136	0	0
音声DL	20	20	20	0	0	0
WEB音声	23	43	55	103	119	138
音声DLアプリ	0	0	14	67	83	107
MP3音声	0	16	20	19	0	0



【グラフ1】朝日出版社音声教材変遷

3.2 白帝社（2016年～2023年）

3.2.1 カタログ概要

「白帝社」は1926年に創業され、創業者の死去にともない一時出版活動が中止となったが、1975年に出版活動を再開、1977年に現在の「株式会社白帝社」が設立された。⁹主に中国、韓国、日本語関係の研究書、辞典、教材、雑誌等を出版しており、教科書分野では中国語と韓国語・朝鮮語のみである。カタログのタイトルは『白帝社図書目録〇〇〇〇（西暦年）』であり、白帝社のその年度の出版物全てがまとめて掲載されている。最初に「新刊」、新刊・近刊書籍一覧」が掲載されており、2022年版まではそれぞれ本編に再掲されている。¹⁰巻末には索引が付いている。中国語教科書は、「初級テキスト」／「初級～中級テキスト」／「中級テキスト」の3つのカテゴリーに分類されている。

3.2.2 アイコンの種類の変遷

付属資料や音声の表示の説明は目次の頁に示されている。それらをまとめると、【表3】のようになる。CD添付のある教科書は本編各教科書に「CD付」のアイコンが付いている。

「TCD☆」は2017年以降なくなっているが、同年より「☆すべてのCD-ROM付テキスト、音声DLテキストに、同じ内容を収録したCD（CDプレーヤーで再生可）を用意しています。」との一文が加わっており、実質上は2017年以降も教員が「TCD☆」を請求することは可能となっている。

「電子書籍」のアイコンの登場は2023年であるが、電子書籍自体は2016年～2022年のカタログ本編にも最後にまとめて掲載されている。アイコンが登場したということから推測されるのは、電子版のある書籍の数が一定数に達し、今後も増加する見込みであるということであろう。

【表3】白帝社カタログアイコン

アイコン	アイコン説明	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
TM	教授用資料	○	○	○	○	○	○	○	○
TC	CDには録音されていない部分も収録した教授用カセットテープ	○	○	○	○	○	○	○	○
TCD	教授用CD	○	○	○	○	○	○	○	○
TCD☆	CD-ROM、DL音声と同じ内容を収録したCD	○							
音声DL	小社のホームページから音声をダウンロード	○	○	○	○	○	○	○	○
web教材	学習をサポートする補助教材・情報をホームページに設けている	○	○	○	○	○	○	○	○
電子書籍	電子版がある								○

3.2.3 音声教材の変遷

学生が入手できる音声教材であるCD、CD-ROM、音声DL、WEB音声¹¹の4種類の8年間の変遷を示したものが【表4】および【グラフ2】である。調査範囲は、先述の「初級テキスト」／「初級～中級テキスト」／「中級テキスト」である。なお、一つの教科書に複数の音声教材が付いているものも多数ある。

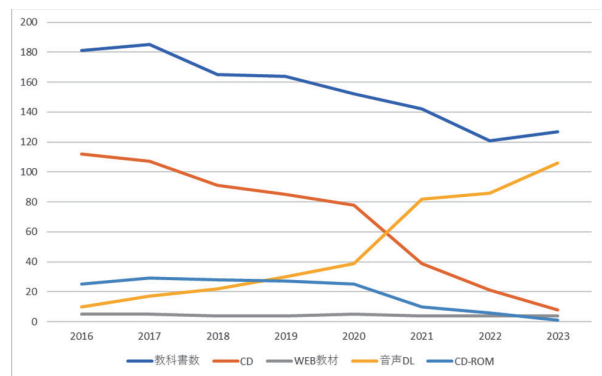
教科書数は全体的に減少傾向にあるが、音声DLの割合が増加し、2021年にCDを上回り、2023年には83.4%に達している。CD付きの教科書は音声DLの増加に反比例して、2016年の61.8%から2023年には6.2%にまで減少している。CD-ROM付きの教科書も一定数あったが、CDと同じく2021年に急速に減少している。WEB教材はもともと数が少なく、横ばいである。今後白帝社の音声教材は音声DLが主流となることが予測される。

白帝社の岸本詩子氏によると、2014年頃から、徐々に新刊はCDをつけずに音声はDL式で発行することが始まり、また、2020年春の重版にて既刊の教科書もCDからDL式への切り替えが始まったそうである

(目録は毎年秋に次の年の分を作成しているため、2019年秋に作成された2020年の目録には反映されていない)。「WEB教材」については、著者が作成したり大学のサポートで作成してもらったりすることが多く、2000年代はじめごろから始まった印象であるとのことだった。¹²

【表4】白帝社音声教材数

	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教科書数	181	185	165	164	152	142	121	127
CD	112	107	91	85	78	39	21	8
WEB教材	5	5	4	4	5	4	4	4
音声DL	10	17	22	30	39	82	86	106
CD-ROM	25	29	28	27	25	10	6	1



【グラフ2】白帝社音声教材変遷

3.3 白水社 (2015年～2023年)

3.3.1 カタログ概要

白水社は1915年に創立された、100年以上の歴史を有する出版社である。一般書、語学書、教科書の出版を手掛けている。教科書分野では、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語・ラテン語、中国語、ロシア語、韓国・朝鮮語の教科書を刊行している。¹³

中国語の教科書カタログは『白水社中国語教科書目録○○○○(西暦年)』というタイトルで、30頁ほどの薄手の単体の冊子になっている。目次と本編から構成されており、教科書タイトルがすべて目次の1頁にまとめて掲載されているため、巻末索引はない。教科書は、「発音」(1冊のみ)／「初級」／「準中級」／「中級」の 카테고リーに分類されている。

3.3.2 アイコンの種類の変遷

付属資料や音声の表示の意味については目次の頁に「各記号について」として示されている。それらをまとめると、【表5】のようになる。

アイコンについての説明欄は2015年カタログには見当たらないため、2016年からの8年間のものをま

とめた。アイコンの種類にそれほど変化はないが、白水社の牛山裕子氏によると、中国語教科書で音声DLが開始されたのは2015年版以降¹⁴とのことで、2015年より新たに「音声ダウンロード」のアイコンが加わったことになる。

【表5】白水社カタログアイコン

アイコン	アイコンの説明	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
CD付	教科書一冊一冊にCDが付いていることを示します	○	○	○	○	○	○	○	○
音声ダウンロード	白水社ホームページ(筆者: URL省略)から音声をダウンロードすることができます	○	○	○	○	○	○	○	○
教室用テープ有り		○	○	○	○	○	○	○	○
教授用資料有り		○	○	○	○	○	○	○	○
教授用解答例有り		○	○	○	○	○	○	○	○
教授用テキスト有り		○	○	○	○	○	○	○	○
教室用CDあり				○	○	○	○	○	○

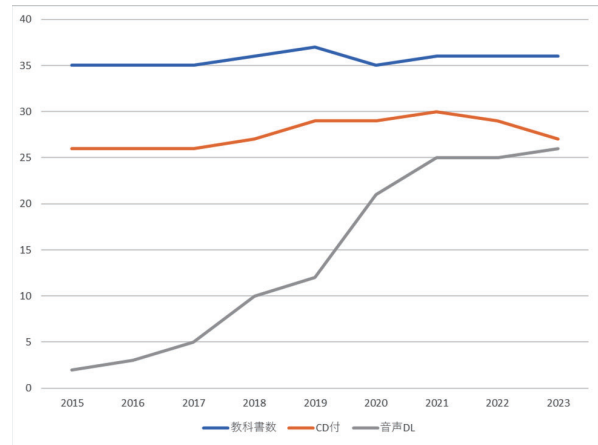
3.3.3 音声教材の変遷

学生が入手できる音声教材は原則としてCDと音声DLの2種類である。¹⁵先述の4つのカテゴリー全てを調査範囲として9年間の変遷を示したものが【表6】および【グラフ3】である。

教科書数は他2社と比べて少ないが、音声教材の変化は明確に表れている。音声DLの比率は、2015年の5.7%から2023年には72%にまで上っている。CDの減少傾向はそれほど顕著ではないが、2022年からCDなしで音声DLのみの教科書が登場(2022年1冊, 2023年2冊)したことにより、同年よりやや減少傾向が見られる。また、2022年版カタログより最終頁には「白水社ホームページからダウンロードできる音声をCDでお求めいただく場合は、1枚定価1100円(本体1000円+税)で販売いたします」の一文が加わっている。これにより、今後は音声DLが主流になり、CDが減少していくものと推測される。

【表6】白水社音声教材数

	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
教科書数	35	35	35	36	37	35	36	36	36
CD付	26	26	26	27	29	29	30	29	27
音声DL	2	3	5	10	12	21	25	25	26



【グラフ3】白水社音声教材変遷

3.3.4 3社の比較

これまで見てきた各社それぞれの音声教材の種類と変遷を比較してみると、以下のことが言える。

- ①朝日出版社と白帝社はWEB音声や音声DLアプリの普及によってCDがすでに淘汰または淘汰されようとしている。白水社も今後その方向に進むことが予想される。
- ②白帝社と白水社は音声DLが主流となってきているが、朝日出版社は2020年のオリジナルアプリ「リスニング・トレーナー」の登場によって音声DLが淘汰されている。このアプリはスマートフォン専用で、いつでもどこでも好きな時に音声が聞け、さらに低速再生・リピート再生機能も搭載されている大変便利なものであり、音声教材の中では最先端を走っていると言えよう。ただ、一般的にアプリ開発・作成には高額の費用が掛かるようで、どの出版社も手軽に取り入れられるものではないのであろう。
- ③学習者が使用できる音声教材はWEB音声、音声DL、アプリが主流になってきているが、教員にはまだまだ教授用CDを使用できる余地が残されている。その理由としては、教員の年齢層の幅が広く、デジタル機器の操作に慣れていない者も多いこと、教室全体で音声を聞かせる際には、教員の私物であるスマートフォンやインターネットにつなげる必要のあるパソコンを使用して音声を聞かせるよりも、教室備え付けのCD再生機器を使用するほうが、操作がシンプルであること等が考えられる。

4. 音声教材利用状況に関するアンケート調査

4.1 本学での第二外国語の位置づけおよび各言語履修者数

本学では学部1年生と2年生は第二外国語を必修と

しており、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、イタリア語、スペイン語の中から選択することができる。あらかじめ第一希望、第二希望の言語を申請してもらい、人数によってはやむを得ず第二希望の言語を履修してもらうこともある。1年次に選択した言語を原則として2年次にも継続して履修することになっている。受講は週1コマである。¹⁶1年次春学期に「〇〇語基礎Ⅰ」、秋学期に「〇〇語基礎Ⅱ」、2年次春学期に「〇〇語基礎Ⅲ」、秋学期に「〇〇語基礎Ⅳ」を受講することになっている。毎年クラス数に若干の変動はあるが、今年度のクラス数および履修者数は【表7】と【表8】の通りである。

【表7】1年生各言語クラス数および履修者数

	中国語	ドイツ語	フランス語	ロシア語	イタリア語	スペイン語
クラス数	18	4	3	5	2	2
履修者数	568	128	93	161	52	84
合計人数	1086					

【表8】2年生各言語クラス数および履修者数

	中国語	ドイツ語	フランス語	ロシア語	イタリア語	スペイン語
クラス数	17	4	4	4	2	2
履修者数	555	107	98	141	34	49
合計人数	984					

4.2 『ひろがる中国語』および『ひろがる中国語文法トレーニング篇』について

本学の中国語クラスでは、1年生は『ひろがる中国語』、2年生は『ひろがる中国語文法トレーニング篇』（以降『文法トレーニング篇』とする）を統一の教科書として使用している。『ひろがる中国語』は、筆者が本学に着任した2017年度に本学人文社会科学系教授である木村守氏と共同執筆し、2018年4月に白帝社より初版発行、同時に1年生用の教科書として試用を開始、2020年4月にISBNを付して正式に発行となった。内容は発音篇と会話篇10課から構成されている。『トレーニング篇』は、もともと木村氏が他大学で使用していたオリジナル教材を基に共同で作成し、2019年3月に白帝社より初版発行、同年4月より2年生用の教科書として試用開始、2020年3月にISBNを付して正式に発行となった。全11課から成り、各課ステップ1からステップ5まで徐々に難易度が上がって無理なく文法が身につくドリル形式の教科書である。また、2021年5月よりそれぞれの教科書に準拠した単語帳も発行している。

両教科書の音声教材はWEB音声形式を採用しており、初版当初より教科書にQRコードを印刷して、スマートフォンより簡単にアクセスできるようにしてい

る。WEBページの作成・管理・更新は木村氏が担当している。ただし、単語帳の音声教材は現時点では作成していない。

4.3 調査目的

今回の調査では、両教科書における学習者の音声教材の使用状況（使用環境、使用頻度、使用満足度）、および授業者の授業での音声教材活用状況について尋ね、WEB音声形式の利点と問題点を明らかにし、今後のWEB音声教材改善につなげることを目的とする。

4.4 調査対象

- ①本学で中国語を第二外国語として履修している学部生1年生および2年生。
- ②中国語授業を担当している教員。

4.5 調査方法

- ①学生：Googleフォームを使用して1年生用と2年生用それぞれのアンケートを作成し、QRコードおよびURLを掲載した依頼文書を各クラスの担当教員より配布してもらい、極力その場で少々時間を取って回答してもらった。¹⁷実施時期は2023年7月下旬～8月初旬。
- ②教員：Googleフォームを使用して1年生担当教員用と2年生担当教員用それぞれのアンケートを作成し、QRコードおよびURLを掲載した依頼文書を配布し、回答してもらった。¹⁸実施時期は2023年7月下旬～8月初旬。なお、1年生と2年生両方の授業を持っている教員には、両方のアンケートそれぞれに回答してもらったよう依頼した。

4.6 調査内容

学生向けアンケートのタイトルは「『ひろがる中国語』／『ひろがる中国語文法トレーニング篇』音声教材使用状況に関するアンケート調査」、教員向けアンケートのタイトルは「使用」を「活用」に置き換えたものとした。¹⁹

学生向けアンケートの質問項目の内容は、およそ以下のように分類される。

- 基本的な使用状況（使用の有無、使用のタイミング、使用した場所、使用に使ったデバイス、使用頻度、1回あたりの使用時間）
- 満足度（アクセスのしやすさ、ウェブページの操作性、全体的な満足度およびその理由）
- 音声教材が【CD】／【音声DLアプリ】だった場合の使用頻度や使用意欲

●意見や要望, 改善点等

教員向けアンケートの質問項目の内容は, およそ以下のように分類される。

●基本的な活用状況 (学生への音声教材の案内・指導の有無, 授業での活用の有無および活用方法)

●満足度 (アクセスのしやすさ, 音声教材のウェブページの操作性, 授業者の立場からの全体的な満足度およびその理由)

●意見や要望, 改善点等

4.7 調査結果と分析

回答者数は以下の通りである。

【表9】アンケート調査回答者数

	学生	教員
『ひろがる中国語』	391名	11名
『文法トレーニング篇』	294名	8名

以下, 4.5で示した分類別に集計結果を提示し, それぞれに対して分析を試みる。なお, 「○%／○%」とする場合, 前者が『ひろがる中国語』, 後者が『文法トレーニング篇』の数値を示すこととする。

4.7.1 学生向けアンケート

4.7.1.1 基本的な使用状況

①質問: 音声教材 (教科書に掲載のQRコードでアクセス可能) を使用しましたか。

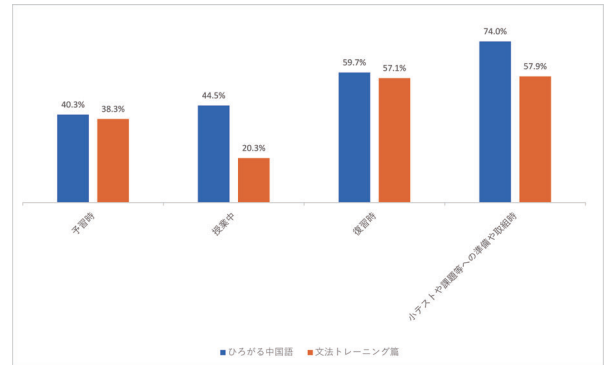
【表10】音声教材使用率

	ひろがる中国語	文法トレーニング篇
はい	78.8%	45.2%
いいえ (音声教材の存在は知っていた)	11.0%	31.0%
いいえ (音声教材の存在を知らなかった)	10.2%	23.8%

「はい」と回答した者は『ひろがる中国語』が78.8%であったのに対し, 『文法トレーニング篇』は45.2%にとどまり, 音声教材の存在を知っていたが使用しなかった者がそれぞれ11.0%と31%であった。「いいえ (音声教材の存在は知っていた)」を選択した者にはその理由を尋ねる質問項目を設定した。結果は「授業中の先生の発音で十分だったから」(67.4%／59.3%) が最多, 次いで「使用する時間がなかったから」(34.9%／37.4%, 「面倒に思ったから」(20.9%／20.9%), 「使いにくそうだったから」(4.7%／15.4%), 「使い方がよく分からなかったから」(16.3%／6.6%) と続いた。

両教科書で結果に差が出た根本的な理由としては, 『ひろがる中国語』が会話中心の教科書で, 『文法トレーニング篇』が文法中心のドリル式の教科書であることが考えられる。前者に比べ, 後者は「読む」よりも「書く」が中心の学習となっており, 音声教材の必要性が比較的低かったからであろう。

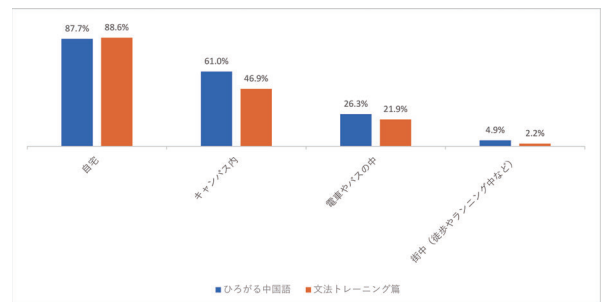
②質問: 音声教材を使用したタイミングを教えてください。(複数選択可)



【グラフ4】音声教材使用のタイミング

両教科書ともに小テストや課題等への準備や取組時に使用することが一番多く, 次いで復習時の使用が多いことが分かった。

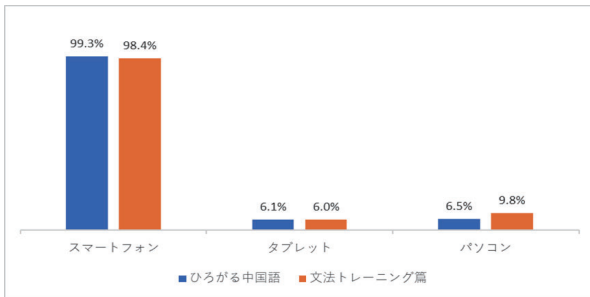
③質問: 音声教材を使用した場所を教えてください。(複数選択可)



【グラフ5】音声教材の使用場所

「自宅」がそれぞれ最多, 次いで「キャンパス内 (図書館, 教室, 部室等)」, 「電車やバスの中」と続いた。街中 (徒歩やランニング時) で使用した者が5%以下であったのは, 本音声教材がまとめて再生する機能を有しておらず, 何かをしながら聞くことに適していないことが理由であると考えられる。

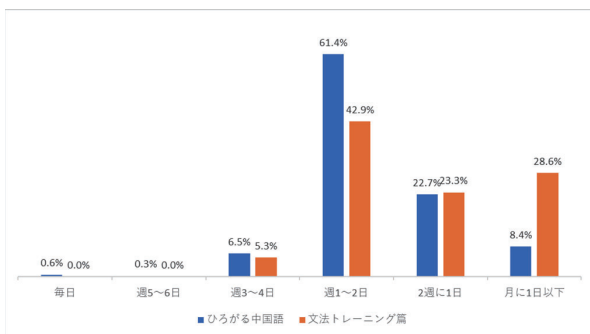
④質問: 音声教材使用に使ったデバイスを教えてください。(複数選択可)



【グラフ6】音声教材使用に使ったデバイス

99.3% / 98.4%の学生が「スマートフォン」を選択し、ほとんどの学生がスマートフォンから音声教材にアクセスしていることが分かった。「タブレット」、「パソコン」を選択した者もいたが、わずかであった。

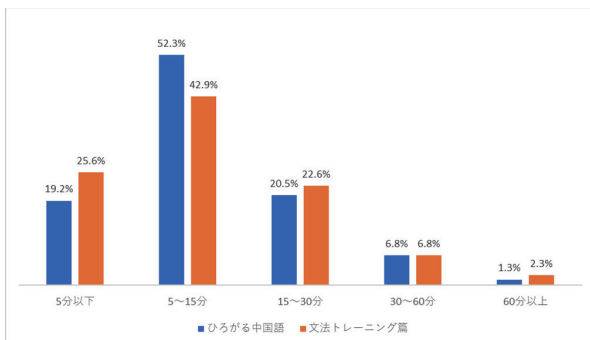
⑤音声教材を使用した頻度を教えてください。



【グラフ7】音声教材の使用頻度

両教科書ともに「週1～2日」が最も多く、「2週に1日」の割合は22.7% / 23.3%と大差がなかったが、『文法トレーニング篇』のほうで「月に1日以下」の割合が高く、ほとんど使用していない学生が多いことが分かった。

⑥質問：音声教材の1回あたりの使用時間を教えてください。



【グラフ8】音声教材の使用時間

両教科書ともに「5～15分」が最も多く、「5分以下」および「15～30分」の割合も次いで多かった。使用頻度が週1～2日が最多という結果と併せて見ると、外国語学習としては学習時間が少ないように感じられる。

4.7.1.2 満足度

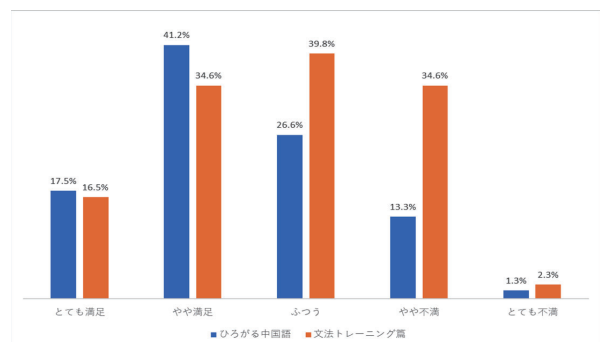
①質問：音声教材へのアクセスは便利だと感じますか。

「とても便利」(35.1% / 34.6%)と「やや便利」(30.8% / 29.3%)を併せて6割以上の学生が便利であると感じていることが分かった。一方で「やや不便」(12.3% / 12.0%)と「とても不便」(1.3% / 3.0%)を併せて1割強の学生が不便に感じていることも軽視できない。後述の③の質問の自由記述欄では、「毎回QRコードを読み取るのがめんどくさい、教科書がないとできない。」 / 「どの第○課のページに記載されているQRコードで飛んでも、結局最初の何課を選ぶページにとぶ」といった声があった。「ふつう」と答えた者の割合は20.5% / 21.1%であり、QRコードが日常に浸透した現代において、特段便利さを感じるわけではないのかもしれない。全体的に両教科書に結果の差はそれほど見られなかった。

②質問：音声教材のウェブページの操作性（見やすさ、使いやすさ）はいかがでしたか。

「とても良い」(11.0% / 13.5%)と「やや良い」(23.1% / 24.1%)を合わせて操作性に満足している学生は30%台にとどまり、「やや悪い」(29.5% / 25.6%)と「とても悪い」(6.2% / 6.0%)を併せた同程度の割合の学生が不満に感じていることが明らかになった。次の③の質問の自由記述欄でも、操作性に対する不満の声が多数見られた。「ふつう」と答えた者の割合は30.2% / 30.8%であった。

③質問：音声教材への全体的な満足度はいかがですか。



【グラフ9】音声教材への満足度

両教科書で差が見られた。『文法トレーニング篇』のほうが、『ひろがる中国語』よりも満足度が低いことが分かる。大きな理由としては、『文法トレーニング篇』のほうが音声教材への依存度が低く、学習に役立っているという感覚があまり感じられなかったことが、不満へとつながっているからではないかと考えられる。

本質問に関しては、自由記述形式でその選択肢を選んだ理由についても尋ねた。その結果、それぞれ246件と66件の回答を得られた。そのうち不満点と判断される内容の回答をカテゴライズすると、およそ以下のように分けることができる。²⁰

●操作性に関するもの (35件 / 9件) : スマートフォンだと操作がしにくかった / ページ間の移動がやりにくかった / 音声ボタンを押すまでの過程が多い

●見やすさに関するもの (32件 / 2件) : 文字が小さい / 見たい場所を探しにくい / 教科書と音声の対応している部分が分かりづらい

●再生ボタンに関するもの (28件 / 9件) : 再生ボタンが小さくて押しにくい / スマートフォンで見ると再生ボタンがつかめつかめ押しにくい / 再生ボタンと中国語が被っていて見づらい部分がある

●通しの音声・再生速度に関するもの (27件 / 4件) : 全文通しの音声があるとさらに暗唱の練習になる / 全体の流れも聞きたいので、1文ずつと、通しバージョンを作って欲しい / 発音の速度調整機能が欲しい

●単語に関するもの (16件 / 3件) : 単語帳の音声がない / 単語の音声は載ってなく使いづらい

●内容に関するもの (12件 / 11件) : 教科書とWEBで言葉が違う / 教科書の一部がなかった / 誤植が多い / 答えが欲しい

●システム不具合に関するもの (8件 / 2件) : 音声流れるまでにラグがあることがあった / 音声ボタンを押しても流れない時がある / 使っているスマートフォンだと、旧版のほうしか使えない / たまにフリーズしてしまったりしたことがあった

●形式に関するもの (3件 / 0件) : 音声のダウンロードなどが出来ないため、アプリなどがあれば良い / ダウンロードできないので毎回通信読み込みが発生し、通信状況が悪い時や低速の時使用することが難しい

4.7.1.3 音声教材が【CD】 / 【音声DLアプリ】だった場合の使用頻度や使用意欲

①質問: 音声教材が【CD】だった場合、使用頻度や

使用意欲は現在と比べてどのように変わると考えられますか。

「かなり減る」(62.7% / 64.7%) と「やや減る」(20.1% / 12%) を合わせて約8割の学生が減ると答えた。「あまり変わらない」は11.7% / 17.3%, 「やや増える」と「かなり増える」を選んだ者は合わせて5.5% / 6.1%であった。

②質問: 音声教材が【音声ダウンロードアプリ】だった場合、使用頻度や使用意欲は現在と比べてどのように変わると考えられますか。

「あまり変わらない」(40.6% / 33.8%) を選んだ者が最多であった。「やや増える」と「かなり増える」を選んだ者は合わせて38.3% / 37.6%, 「かなり減る」と「やや減る」を選んだ者は合わせて21.1% / 28.5%であり、アプリのほうがWeb音声よりも使用頻度や使用意欲が上がるという学生が多いという結果となった。

4.7.1.4 意見や要望, 改善点等

自由記述形式で両教科書それぞれの音声教材に関して、意見や要望、改善点等を書いてもらう項目を設け、119 / 41件の回答が得られた。回答内容は「4.7.1.2満足度」の③と重複するものが多かったが、改めてまとめるとおよそ次のようになる。

①単語帳にも音声をつけてほしい。 / 本文以外の単語や知識のときの音声もほしい。

②スマートフォン向けにもう少し使いやすいように改善してほしい。

③QRコードを読むとすぐそのページの音声に飛ぶようにしてほしい。 / 読み込みのQRコードを大きくしてほしい。

④再生ボタンを押しやすくしてほしい。

⑤文章をまとめて再生できるようにしてほしい。

⑥音声の再生スピードを変えられるようにしてほしい。

⑦アプリにしてほしい。 / アプリは容量が圧迫されるためこの形式のままがいい。 / ネット環境がなくても使用できるのでダウンロードできるようにしてほしい。

⑧たまに音声流れなくなるバグを改善してほしい。

4.7.2 教員向けアンケート

4.7.2.1 基本的な使用状況

①質問: 音声教材の使用を学生に案内・指導しましたか。あえて指導しなかった場合は、「その他」にその

理由をお書きください。

「はい」が10人／6人、「いいえ」が0人／1人、「その他」が1人／1人であった。ほとんどの教員が音声教材の使用を学生に指導したことが分かったが、『文法トレーニング篇』のほうでは、教科書の解答が見えてしまうためあえて指導しなかったという声もあった。

②質問：音声教材を授業に活用しましたか。

「はい」が6人／4人、「いいえ」が3人／2人、「その他」が2人／2人であり、約半数の教員が音声教材を授業に活用したと答えた。活用方法は、「毎回の配布資料にアドレスとQRコードを載せた」「授業中や宿題で会話の暗唱をさせる時に活用した」「ロールプレイをするときの確認として」等の回答があった。

4.7.2.2 満足度

①質問：音声教材へのアクセスは便利だと感じますか。

「とても便利」5人／2人・「やや便利」1人／2人・「ふつう」2人／3人・「やや不便」2人／0人・「とても不便」0人／0人

②質問：音声教材のウェブページの操作性（見やすさ、使いやすさ等）はいかがでしたか。

「とても良い」1人／2人・「やや良い」2人／2人・「ふつう」3人／3人・「やや悪い」4人／0人・「とても悪い」0人／0人

③質問：授業者の立場からの、音声教材への全体的な満足度はいかがですか。

「とても満足」2人／0人・「やや満足」2人／2人・「ふつう」3人／5人・「やや不満」3人／0人・「とても不満」0人／0人

全体的に『文法トレーニング篇』の満足度のほうが高いように見受けられるが、両教科書が会話中心か文法中心かで性質が異なることを考えると、『文法トレーニング篇』のほうが授業者の立場としても音声教材への依存度が低く、相対的に不満が少ないことが考えられる。

自由記述欄では、新出単語のみの音声もあったほうが良い／課ごとにQRコードが印刷されるともっと良い／聞きたい所にすぐに遷移できない／全体通じた会話文・漢詩や発音練習問題の音声もあると宿題として使える／必要な音声までのアクセスが少し面倒、といった声があった。

4.7.2.3 意見や要望、改善点等

授業者からの意見・要望としても、学生から得た回答と共通して、①初級で発音の基礎を築く段階なので音声の速度が速いように感じる。②1回押して全文を聞くことができれば、会話全体のイメージや流れを感じることができると思う。といったものがあった。

4.8 考察

ここまでの調査結果と分析をもとに、WEB音声形式の利点と問題点・改善点について考えてみる。

まず、利点として以下の4点が挙げられる。

①アクセスがしやすい。今回の調査により、98%以上の学生がスマートフォンを使ってWeb音声教材にアクセスしたことが分かった。スマートフォンがあればどこでも聞けるのが便利だという声が多く、CDの場合は再生機器がないため困るという声もあった。また、音声DLの場合、スマートフォンのどこにダウンロードされたか見つけにくい場合も考えられよう。パソコンでダウンロードする場合には、パソコン上で使用するか、スマートフォンに音声を入れなおして使用する必要があり、手軽さに欠ける。ただし、WEB音声形式の場合、URLではなくスマートフォンのカメラをかざすだけでWEBページにアクセスできるQRコードの掲載が必須と言えよう。

②スマートフォンのストレージが圧迫されない。この点は、アプリ形式と音声DL形式にはない利点であると言える。WEB上で音声を再生するため、アプリのダウンロードや音声のDLが不要で、スマートフォンのストレージを気にせず使用することができる。

③音声教材の修正・更新が随時可能である。CDの場合、一度作成してしまうと修正が困難であり、早くとも翌年度の教科書改訂時まで待たなければならない。音声DLの場合でも、修正があった場合には学生に周知し、ダウンロードし直してもらわなければならない。しかしWEB音声の場合、いつでもWEBページで修正や更新ができ、学生は常に最新の音声を聞ける状態にある。また、現代は発展速度が目まぐるしい社会であり、それに伴い教科書の内容も頻繁に見直して時代に追いつかなければならないが、WEB音声教材形式によって、教科書本体の修正・更新もしやすくなるだろう。

④比較的成本がかからない。アンケートではアプリにしてほしいという声が見られたが、アプリ作成は専門業者に依頼しないと難しく、高額な費用が掛かるが、WEB音声教材の場合は自身で作成できる教員も多く、費用が抑えられる。

次に、問題点・改善点を3点挙げる。

①操作性があまりよくない。パソコンやタブレットのような大きな画面で見ると問題は問題ないが、スマートフォン上では文字が小さく、見やすさ、操作性の良さに欠けるため、レイアウトやデザインの工夫が必要である。

②インターネットに繋がっていないと使用できない。アンケートでは、ネット環境がなくても使用できるのでダウンロードできるようにしてほしいという声があった。この点は利点の②と相反するが、WEB音声に加え、音声DLもできるようにするのが理想的であろう。

③内容・機能を充実させる必要がある。アンケート結果からは、会話を最初から最後まで通して読んだ音声、単語の音声、再生速度調整機能、リピート再生機能の需要が比較的高かったことが分かった。これらの機能をつけることができれば、より学習者の使用頻度や使用時間が上がるが見込めるだろう。ただしこの点は、WEB教材作成者の技量によるところが大きく、各種教科書のWEB音声間で差があると思われる。また、学習者の立場からだけでなく、授業者の立場からも使いやすいような内容・機能を充実させる必要がある。

以上、今回のアンケート調査からWEB音声形式の音声教材の利点と問題点を明らかにした。WEB音声の使用率は特に『ひろがる中国語』のほうで高かったが、満足度は学習者・授業者ともに決して高いとは言えない結果であり、今後さらなる改善・改良・工夫が求められる。

5. おわりに

朝日出版社・白帝社・白水社の3社では、近年において教科書添付のCDが完全にあるいは徐々に淘汰され、音声DL、WEB音声、音声DLアプリが主流となってきている。本学で使用している中国語教科書もWEB音声形式を採用しており、学生がより効果的・効率的に中国語学習を進められるよう工夫をしているが、まだまだ改善の必要があることが今回のアンケート調査で明らかになった。いくつかの問題点を改善すれば、外国語学習に欠かせない「音声を聞くこと」をより高い頻度でより長い時間、学生に行ってもらえることができるかもしれない。

とはいえ、長らく主流であったCDの時代に比べると、おそらく外国語学習において授業時間外に「音声を聞く」という学生は圧倒的に増えたのではないだろ

うか。これは外国語教育において大変喜ばしいことであり、中国語教育を担う一教員として、今後の音声教材の更なる進化に期待・貢献したい。

謝辞

本研究での調査にあたり、朝日出版社の新美朱理様、白帝社の岸本詩子様、白水社の牛山裕子様には情報およびカタログのご提供を頂き、大変お世話になりました。心より感謝の意を表します。また、アンケート調査にご協力いただいた本学中国語非常勤講師の先生方ならびに学生の皆様にも心よりお礼申し上げます。

注

- 1 総務省『令和5年版情報通信白書』第4章第11節1. 情報通信機器の世帯保有率の推移／2. モバイル端末の保有状況
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r05/html/datashu.html> (2023年8月21日最終閲覧)
- 2 総務省報道資料「令和4年通信利用動向調査の結果」(令和5年5月29日) https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/230529_1.pdf (2023年8月27日最終閲覧)
- 3 「音声DL」はインターネットにつながっている環境下でパソコンやスマートフォンに音声データをダウンロードし、聞く際にはネット環境がなくても聞くことができる。また、ダウンロードした音声データは他のデバイスに移すことも可能である。「WEB音声」はWEBページ上で再生して聞くため、聞く際にはインターネットにつながっている必要がある。「音声DLアプリ」はスマートフォンで使用するアプリケーションで、オフラインで聞くことができるようにすることも技術的には可能である。
- 4 中西・植松(2012) 62頁。
- 5 朝日出版社HP: <https://www.asahipress.com/about/> (2023年8月29日最終閲覧)
- 6 2022年10月31日受信の新美朱理氏からの返信メールより。
- 7 「ビデオ・DVD関係教材」も豊富であるが、他の出版社2社にはないカテゴリーのため、今回は調査対象外とした。本研究では主に大学生の中国語学習を対象としているため、「高校中国語」のカテゴリーも対象外とした。
- 8 小数点第2位切り捨て。以降同様。
- 9 白帝社HP: <https://www.hakuteisha.co.jp/company/cc1520.html> (2023年8月29日最終閲覧)
- 10 2023年版は本編には再掲されていない。
- 11 白帝社では「WEB教材」という名称を使用しているが、

- 音声教材を兼ねた教材であるため、本稿ではWEB音声として扱う。
- 12 2023年8月21日受信の岸本詩子氏からの返信メールより。
- 13 白水社HP：<https://www.hakusuisha.co.jp/company/cc1062.html> (2023年8月29日最終閲覧)
- 14 2023年8月25日受信の牛山裕子氏からの返信メールより。なお、牛山氏によると、白水社で音声DLが初めて導入されたのは、2012年度のフランス語新刊教科書3点で、当時はまだCD付が主流であったが、すでに一部の教員から「学生はCDを使用しない」という声があり、それを反映するかたちでダウンロード配信を開始したものと記憶しているとのことである。
- 15 カタログ最終頁に、「カセットテープ学生購入価格」の提示があるため、おそらく「教室用テープ」を学生が購入することも可能であると思われるが、「カセットテープは生産終了に伴い在庫が残りわずかとなっております」の記述も見られるため、学生がカセットテープを入手することは稀であると考えられる。また、1冊のみビデオ付きの教科書がある。
- 16 教育支援課程多文化共生教育コースの1年生のみ、週3コマ受講。
- 17 依頼文には、個人情報特定されないよう十分な配慮をすること、研究目的以外で使用することはないこと、調査への回答または回答しないことが受講中の中国語科目の成績に影響することは一切ないことを明記し、十分な配慮を行った。
- 18 依頼文には、個人情報特定されないよう十分な配慮をすること、研究目的以外で使用することはないことを明記した。
- 19 本研究では、「使用」は学習者自身の使用状況、「活用」は教員の授業での活用状況というニュアンスの違いで使い分けている。
- 20 1件の中で複数点述べている場合は複数件に分けてカウントした。

参考文献

- ・中西正樹・植松茂男「大学生の音声教材再生環境について—2007年アンケート調査から見る現状と展望」摂南大学外国語学部『摂大人文学』第16号、75-96頁、2008年9月
- ・中西正樹「QRコードを利用した外国語音声教材の携帯電話向け配布--紙媒体とデジタル機器をつなぐ試み」摂南大学外国語学部『摂大人文学』第17号、109-128頁、2009年9月
- ・中西正樹・後藤一章「大学生の音声教材再生環境について（2）2007年調査と2011年調査を比較して」摂南大学外国語学部『摂大人文学』第19号、61-83頁、2012年2月

The Changes in the Production of Language Learning Audio Materials and Its Usage Status Among University Students: A Study of Chinese Language Textbook Catalogues

FAN Wenling*

Asian Languages and Cultures

(Received for Publication; August 30, 2023)

Abstract

With the spread of smartphones since 2007, audio materials in language education have been undergoing constant changes. This study examined three of Chinese language textbook catalogues by different publishers to discuss the recent changes in the production of language-learning audio materials. It also examined the usage status and user satisfaction of the audio material among Chinese language-learning students and their instructors at Tokyo Gakugei University.

The study showed two findings. First, while CDs have completely or gradually become obsolete among all three publishers, the production of audio download, audio streaming and audio download apps have become the mainstream. Second, despite the frequent use of audio streaming materials in conversation practice-based textbooks, the satisfaction rate of those textbooks was not high. There finding suggested further improvements in the operability, visibility, content and functions of the materials.

Keywords: Language education, Chinese language, Chinese language textbooks, textbook catalogue, language-learning audio materials

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)